
博麗霊夢は妖怪に好かれる

リペヤー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

博麗霊夢は妖怪に好かれる

【Nコード】

N6448G

【作者名】

リペヤー

【あらすじ】

妖怪に好かれる霊夢の話。ある意味ほのぼのかもしれない。微妙にホラーかもしれない。

博麗神社は妖怪神社。そんな異名が罷り通る位に、博麗神社は妖怪が来る。もちろん妖怪が参拝などする筈も無い。ならばどうして妖怪達は神社に訪れるのか？

答えは簡単。彼女達は皆、そこにいる巫女　博麗霊夢を好いて
いるからである。

「霊夢、遊びに来たわよ。たまには紅茶でもいかが？」

永遠に幼き紅い月、レミアアィスカーレット然り。

「やつほーお姉さん！　いやあ今日はいい死体運び日和だねえ」

地獄の輪禍、火炎猫　燐然り。

「あらあら霊夢。今日も暢気にしてるのね」

神隠しの主犯、八雲　紫然り。

割合するが他多数（鬼や天狗、エトセトラ……）の妖怪からも霊夢は好感を持たれていた。

そんな人気を持つ霊夢であつたが、霊夢の抱く彼女達への感情は冷めた物である。どうでもいい、とまではいかなかったが、さしたる程の興味も無いと言つて良かった。

それが余計に妖怪達から好かれる理由になつていると霊夢自身はあまり気づいていないのだが……。

ある日の事である。レミリアに連れられ、霊夢は人里のカフェー（西洋の茶屋と聞いた）にやってきていた。

正直なところ、吸血鬼であるレミリアが人里のカフェーに入るのはどうなのかと霊夢は思った。しかし、「人間用の店にしちゃ中々美味しい珈琲を入れてくれるのよ、ここ」とレミリアが存外に楽しそうに語る姿を見て、まあいいかと霊夢はレミリアに後に付いて店内へと入った。

いらっしやいませ、と女性の店員（ウェイトレスと呼ぶらしい）から八キ八キとした声がかかる。彼女はレミリアを見るとにこりと微笑を浮かべ、霊夢を見ると「あら」と言いたげな表情を浮かべた。

「いらっしやいませ、レミリア様。今日は咲夜様とは一緒に無いので？」

「ええ、お忍びつてヤツよ。こちらは私の友人」

「あらまあご友人様で」

ウェイトレスは本当に驚いたようで、少し声が裏返っていた。どうやら彼女は霊夢が「博麗の巫女」とは知らないらしい。確かに霊夢は異変を解決する時か、たまの食糧の買い込み時くらいにしか外を回らないため、人里の一介のウェイトレスが霊夢を知らないのは道理と言えた。

まだ朝寄りの昼であったためか、霊夢達以外には客は無く、レミリア曰く「座ってみたかった」というカウンター席に霊夢とレミリアは腰かけた。隣に座るレミリアが品表を広げて「これが美味しい」「これがオススメ」と珈琲の名前を指しながら霊夢に説明する。緑茶には多少こだわりのある霊夢だったが、珈琲などは飲んだ事自体

が数える程度しかないので、レミリアのそれはありがたかった。

そうして決めている間に、コトリと霊夢の前に水が置かれる。「お決まりですか？」とウエイトレスは相変わらず人懐こそうな笑顔を浮かべて霊夢たちに問いかけてきた。

「ええ、私にはこれ。霊夢にはこっちをお願いするわ」

「畏まりました」

そう答えながらウエイトレスはレミリアの前にも水を一つ置き、

レミリアの隣の席にも水を一つ置いた。

え？ と霊夢の心中に疑問符が浮かぶ。レミリアもウエイトレスのそれには意表をつかれたようで、子供らしいキョトンとした表情を浮かべていた。

それにウエイトレスは気付いていないのか、さらに言葉を連ねる。

「もう一人の方がいらっしやらないようですが、オーダーは別で宜しいですか？」

……訳が分からない。霊夢は軽く眉をしかめた。少なくともこの店内で客と呼べるのは、霊夢とレミリアの二人だけである。

「……貴女、何を言ってるのかしら？ 私達は二人で来たんだけど」

レミリアは少し苛立ったようにウェイトレスを睨み付けた。ウェイトレスはその視線に萎縮したようだったが、それ以上に怪訝さが彼女の中で勝っているようだった。

「い、いえ。先ほどもう一人お客様が一緒に……」

「……は？」

ぞわ、とレミリアの苛立ちが圧力となって噴出す。ひ、とウェイトレスが一步退いた。

レミリア、と霊夢が肩を掴みそれを窘める。確かにウェイトレスの行動は霊夢にとっても不可解だったが、それで吸血鬼が人間相手にいざこざを起こして良い筈もない。博麗の巫女としても、それを見逃すわけにも行かなかった。

立ち上がりかけていたレミリアはじろりと不満げに霊夢を一瞥したが、軽く鼻を鳴らして再度席に腰を下ろした。彼女としても、せっかくの外出をこのような形で台無しにしたくは無かったのだろう。

大変失礼しましたとウェイトレスがペコペコと頭を下げることで、その場はひとまず収まった。

霊夢の周辺で少しおかしいことが起きるようになったのは、それからである。

部屋の前の廊下を歩いていると、部屋の中に視界の隅を掠めるようにして小さな人影が入る。そちらへ視線を向けてみれば誰も居ない。ただがらんとした無人の部屋があるだけである。

最初のうちは紫が何か新しい悪ふざけでも思いついたのだろうと霊夢は放っておいたが、よく考えてみれば紫が「ただ居るだけ」等という退屈極まる悪戯をするはずが無いと霊夢は気付いた。あの神出鬼没な妖怪ならばもつと無駄に凝った悪戯をするだろう。

となると何か低級な妖怪か、浮遊霊にでも取り付かれたのかと霊夢の思考は逢着した。存在そのものを幽かにしか感じさせないから相当に弱いのだろう。

それにただ居ると言うだけで、実害があるわけでも無い。寝首でもかくつもりならば即座に被ってしまえば良い。結局霊夢はそれを放置することにした。

「やあやあお姉さん。あつそびに来たよー」

現象が起こる様になって一週間ほど経ったある日の事である。

旧地獄に住まう死体運びの火炎猫燐こと、火車のお燐が神社にやって来た。彼女愛用の猫車の車輪はガシヤガシヤと軋みを上げており、霊夢の目にも長い間それに油が差されていないことが見てとれる。霊夢がそれを言えば、お燐は「最近では運ぶ死体が少なくてね。みんな火葬しちゃうからさ」と憂いの表情で呟いた。

そこでふと、何かに気付いたようにお燐は霊夢から視線を外し、霊夢の左側の空間に目をやった。猫らしい縦長の瞳が丸く開かれ、お燐はそこを注視している。そして、ニヤリ、と文字通り獲物を見つけた猫の狡猾な笑みを浮かべて、

ばっ
ばちんっ
にゃあっ

たった今起こったことを文字として表現するならば上記のようになる。もう少し詳しく記述するとするならば、霊夢の左の空間に向けてお燐が飛び掛り、それに向けて霊夢が札を投げつけ、お燐が悲鳴を上げて弾き飛ばされた、となる。

あててて、とお燐は腰をさすりながら立ち上がった。いきなり何してんの、と霊夢がしかめ面でその姿へと問いかける。

「い、いやあ、あたいは死体専門なんだけど、なんかお姉さんに霊が憑いてるみたいだったから外してあげようかと」

お燐の言葉に、ああやっぱり何か浮遊霊に取り付かれてたのか、と霊夢はどこか納得した。「除霊」と言わず「外す」などと言っている点からして、どうやら旧地獄に連れ去ることが目的だったようである。反射的に迎撃した霊夢であったが、そのような目的だとすれば流石に霊夢としても止めざるを得なかった。お前は死んでいればなんでもいいのかと霊夢が言及すると、「死体が無いんだよう」とお燐はうなだれた。……火車の生計は中々逼迫しているようである。

その日の夜のこと。さつきからあれ見ないな、と思いつながら霊夢が居間に入ると、なぜか八雲紫が茶を飲んでいた。

勝手に入るな、茶を飲むなと怒鳴りつけたが、紫はくすくすと笑うばかり。元より効果など期待していないが、その気味の悪い微笑みを浮かべられると、こいつはやっぱり妖怪なんだなと霊夢は再認識させられるのである。

「今日は手紙を預かっていてね。はい、貴女宛」

紫はそう言うと、封筒を霊夢へと差し出した。「ああ安心なさい。読んでないから」と至極どうでもいい言葉を付け加えると、紫はスキマを開いて居間から消えた。

しばらくあっけに取られていた霊夢だったが、その手に持たされた封筒に視線を下ろす。表には拙い文字で「みこさまへ」と書かれていた。ひっくりかえして裏を見るが、差出人の名前は無い。

仕方なしに霊夢は封を切り、その中から紙を取り出した。

『つきまとってしまってごめんなさい。』

きょうはまもってくれてありがとございました』

短い手紙である。

文章からして、この一週間霊夢に憑いていた者からの手紙らしい。全てひらがなであることから、どうやら子供の霊だったのだろう。霊夢はしばらくそれを眺めた後、痛まないようにそっと手紙を封筒に戻し、その封筒を筆筒の一番上の段に大切に仕舞った。

次の日、霊夢は機嫌が良かった。ふんふんと鼻歌を歌っている始末である。鬼は「宴会だー！」と。天狗は「スクープです！」と。縦横無尽に空駆け巡る。騒がしさここに極まれり。そんな朝寄りの昼であった。

霊夢は一週間前に訪れたあのカフェーにまたやってきていた。最初にあの霊が憑いていると分かったのがここであったし、何よりこの珈琲は確かに美味しかったからだ。

霊夢が店内に入ると、いらっしやいませと八キ八キとしたあの声が掛かる。応対に出たのはあのウェイトレスであった。

「あら、貴女はレミリア様のご友人の」

驚いたようにウェイトレスは言った。一週間前に一度来ただけの霊夢の顔を覚えているとは、伊達や酔狂で客商売をやっていないのだろう。香霖堂の店主にも見習って欲しいものである。

霊夢は軽く挨拶をすると、あのカウンター席に腰を下ろした。時間帯ゆえか、今日も客は霊夢一人である。静かな時間の中、霊夢は品表を広げてどれを飲んでみようかと視線をめぐらせていた。

そうして決めている間に、「お決まりですか？」とウェイトレス

は相変わらず人懐こそうな笑顔を浮かべて霊夢に問いかけてきた。霊夢は悩んだ末、結局先週飲んだものと同じものを頼むこととした。

「畏まりました」

そう答えながらウエイトレスは霊夢の前に水を一つ置き、

その横の席にも、その横にもその横にもその横にもその横にもその横にもその横にも、水を置いた。

(後書き)

お前は次に「妖怪じゃなくて幽霊に好かれてね？」と書き込むっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6448g/>

博麗霊夢は妖怪に好かれる

2010年10月11日00時29分発行